第 II 部

生活をみる

インドネシア，北スラウェシのメガネザル

霊長類の社会生態学は，高崎山と幸島でのニホンザルの社会構造の解明から始まった。そして日本のサル学が国際的な地位を築いていく過程では，イモ洗いや麦洗いなど文化的行動の発見が大きな役割を果たした。そして半世紀が経った。この50年間には様々な議論があった。古くは人類学的視点の偏重と擬人主義，生態学の軽視等々から始まり，“ボスザル”の呼称問題が今でも巷間をにぎわせる。最近ではサル学もかなり趣を変え，生態学的な基盤に基づいた近代的な学問として生まれ変わりつつあるように思われる。霊長類保全のための研究も社会的に大きな期待が寄せられている。この部は，そうした中での最近の話題を集めて紹介したものである。

杉浦は，群れの広がりを実際に複数の研究者で追跡しながら，そのダイナミックな動態をモデル化しようとしている。サル学が始まった頃は，あの有名な二重同心円構造がニホンザル社会のモデルとして位置づけられ，その地域的な変異が論じられたものである。だが当時の研究では，単なる定性的な記述でのみ表され，それが量的に表示できる，あるいは具体的にさまざまな要因を関連させた動的なモデルとして展開されることはついぞなかった。この方法論が本当に有効な種間比較や，個体群内の変異をもたらす要因の分析に使えるようになれば，霊長類の社会構造論に大きな飛躍をもたらすことであろう。

半谷は，屋久島での生態学的な研究を下敷きにしながら，温帯林で生活するということがどういうことなのか，それを研究することが人類進化の解明にとって何故重要なのかということを論じている。疑いもなく，霊長類は熱帯で生まれた動物群である。それがかなりの寒冷地でも暮らせるようになり，我々ヒトに至っては極寒の氷に閉ざされた環境の下でさえも生活している。ヒトとサルとが織りなす壮大なアナロジーの世界への挑戦なのだが，我々が日常行っている個別研究を豊かにするのは，こうした“夢”なのである。本論は，ひとまず屋久島での研究のとりまとめを終え，さらなる展開を目指している著者の今の時点での一里塚であろう。

室山は，現在日本社会で大きな問題になっている獣害問題，なかんずくニホンザルによる猿害が何故ひどくなってきているのかについて，簡明に

論じている。要するに，ヒトとサルとの関係が変わり，その境界が曖昧になって，ヒトの領域とサルの領域が重なってしまう現状が問題なのだが，次に要求されるのは，ではどうすれば解決できるのか，どう解決していけばいいのかという方向性の議論であろう。問題は単純ではない。いまや絶滅寸前の状態にある中山間農業，国際経済の大きな流れの中で否応もなく変わっていく日本社会，そんな中での獣害問題であり，確かな見通しを持たなければ，たいへんな努力も無になりかねない。今後この分野に対しては，ますます社会的な要請が大きくなることであろう。

渡邊は，最近発見された旧世界ザルの道具使用行動について報告している。道具使用行動に関しては，チンパンジーなどの類人猿ではかなり知られているが，それ以外の霊長類ではごくごく原初的な形のものしか知られていなかった。一つの発見は，往々にして類似の発見を次々ともたらすものである。もともと旧世界ザルや新世界ザルでも，道具使用の能力は実験室状況の下で確かめられていた。かっては我々人類に固有と考えられていた能力の一つ一つが，霊長類の進化過程の中で位置づけられつつある。学習による獲得過程や，環境条件に対応する種あるいは個体群による差等々，新たな展開が望まれるところである。

ハフマンは，これまで20年余にわたって続けてきたチンパンジーの薬草利用に関する総論を著した。いずれも腸内寄生虫への対処法であるが，一つは植物の茎の髄をしがんでその非常に苦い樹液を呑み込む行動であり，もう一つは表面が粗く毬っぽい葉を丸飲みする行動である。前者は直接その活動を抑える薬として，後者は消化されずに排出される過程で寄生虫を巻き込んで体外に出す役割を果たす。前者で用いられる *Vernonia amygdalina* は，アフリカの現地住民の間でも民間薬として利用されているという。ここから著者は，医療行為の霊長類全体の中での進化，自己治療行動の生物学的基盤解明への道を探り，かつまた新たな医薬品開発への期待も表明している。こうした点は，まさに人類への進化を解き明かす上で，類人猿の長期観察だからこそできる研究であろう。また現在世界的な問題になっている生物多様性保存の必要性を訴える核心部分の一つでもあ

る。

橋本は，チンパンジーとボノボ，二つの種の違いを論じながら，彼らの非常に頻繁な性行動がなぜ，どのような機能をもって進化してきたのか，さらには性行動のパターンの違いがいかに彼らの社会的な違いを生み出しているのかについて論じている。DNA レベルでヒトとわずか 1.2％しか違わないという話から分かるように，これらの種は我々人類にもっとも近縁な種である。だから人類への進化を考える上で，この二つの種の行動は常に注目されてきた。ただ読者に忘れて欲しくないのは，類人猿の社会や行動がここまで分かってきた背景には，すでに 30 年から 40 年もの継続されてきた観察記録があるのだということである。長期継続観察というのは，日本のサル学のお家芸だと言われてきた。だが今では，世界中の多数の研究者がそれぞれの観察拠点をもって，こうした継続観察に従事している。行動や社会は化石には残らない。その意味で，チンパンジーもボノボも，我々人類の祖先の生活をたどる上ではかけがいのない存在なのである。類人猿の保全プロジェクトが橋本をも含めた多数の研究者によって進められているが，その成功を祈りたい。［渡邊邦夫］